

赤石 宏(あかいし・ひろし)

1、プロフィール

青森県を舞台にした、歴史小説、犯罪小説、ミステリー、民話などを数多く発表。その作品は石坂洋次郎、佐藤愛子、藤沢周平、有村智賀志などから強い支持を得ている。

<生没>

1926(大正 15)年9月 27 日 ~ 2007(平成 19)年 10 月 29 日

<代表作>

『送り絵美人』

『鬼戸の笛』

『津軽のこわい話』

『戦陣訓異聞』

『みちのく犯科帳』

『のびのび教育おもしろ話』

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。県内の小、中、青年師範を経て教職へ。定年退職まで市内に勤務。弘前市寒沢町在住。

2、作家解説

ミステリー作家として青森県内第一人者の名声を博する一方で、多くの歴史小説などを発表。1926(大正 15)年弘前市に生まれる。44 年青森県立弘前中学校卒業後、大湊海軍施設部入部。45 年福山市暁第 6178 部隊に半年入隊。この体験が後の精神形成に強い影響を及ぼす。48 年官立青森青年師範学校卒業。以後弘前市立第三中学校を皮切りに、市内の小、中学校に勤務。87 年市立和徳小学校長を最後に定年退職。

53年「弘前創作の会」(後の「無名群」)に参加。高木恭造、下山俊三らの激励を受け本格的に創作活動に入る。54年同人誌「心象」に参加。58年「松前非常余聞」で、第2回東奥日報小説賞受賞。選者の石坂洋次郎は「力強い簡潔な筆でたたきこみ、材料もよく調べて書いているようだ」と高く評価した。61年「週刊読売」に、新人異色短編「降霊術」を発表。弘前第三中学校の教え子で、当時「週刊読売」記者をしていた長部日出雄の推輓があったという。歴史小説、民話、エッセイ、そしてミステリーのジャンルに精力的に作品を刊行する。新聞に連載小説「M湾殺人事件」(62年陸奥新報)、「新みちのく犯科帳」(84年同紙)などを発表する一方で、ラジオドラマも執筆。特に『みちのく犯科帳』は、78年から延べ6年間連続してRABラジオで放送され、また、同書所収の「獄舎の月」は、91年東京で舞台公演されるなど、その作品は高い評価を得ている。津軽に深い関心を寄せた藤沢周平も、たとえば、『鬼戸の笛』を評して、「手がかかって(歴史に対する慎重な眼くばり、判断保留の部分などを含めて)いるせいで、奥行きが深く完成度の高い作品になっています」と激賞する。91年これまでの文学活動が評価され、青森県芸術文化褒賞受賞。

上記以外の主な著作に、『送り絵美人 津軽殺人風土記』『津軽のこわい話』『戦陣訓異聞』『のびのび教育おもしろ話』などがある。現在は、文章制作グループの顧問や東奥日報の10枚小説選者、弘前学院大学講師などを勤めている。

3、資料紹介

○『送り絵美人 津軽殺人風土記』

図書

1974(昭和49年)12月

194mm×133mm

北の街社刊。処女出版。「津軽殺人風土記」の副題にあるように、津軽を舞台にした推理小説集。8編所収。いずれも郷土色豊かで、風俗、人情、犯罪の陰に潜む人と人との絡み合いが描き出されている。表題作が河出文庫『津軽ミステリー一傑作選』に転載される。

○『鬼戸の笛』

図書

1978(昭和 53)年8月

194mm×133mm

津軽書房刊。歴史小説集。第2回東奥日報小説賞受賞作品「松前非常余聞」など5編所収。藤沢周平が、同作について「歴史小説の枠をはずしたら、もうひと回り大きい小説世界が現れる作品のように思われました」と、石坂洋次郎同様な高い評価を与えた。

○『戦陣訓異聞 戦中派精神形成史』

図書

1981(昭和 56)年6月

194mm×133mm

津軽書房刊。エッセイ集。「戦中派精神形成史」と副題にあるように、わずか半年の軍隊の過酷な体験を中心にした自己の精神形成の背景を描く。教え子長部日出雄との出会い、映画の話、交友録など、著者の人となりを知るには必読の著書。

○『みちのく犯科帳』全三巻

図書

1982(昭和 57)年5月～7月

194mm×133mm

津軽書房刊。犯罪小説集。全三巻。視聴者の高い評価を得たラジオドラマの台本を元に、約 6000 枚の稿を改めて、「明治・大正・昭和」で書き下ろした小説集。罪を犯さざるを得なかった、特に「脱獄囚」の貧しい人たちへの著者の眼差しは厳しく、そして暖かい。